

神曲の倫理思想及びその組織

黒田正利

感興に即しなければならぬ文學作品に倫理哲學神學などの諸問題を求めようとするは、或は好ましからぬことであるから知らない。ダンテに就いて専門的な思索の體系を索めるのは充らないが、ゲーテに於いてそれら諸種の問題が索められる意味にて彼の作品も亦そうした方面の問題を提供してゐる。且つダンテの場合には特にさうである。『神曲』が彼の自叙傳であると稱せられるとき、それは廣い意味に於ての自叙傳であつて、詩人なる彼は哲學者神學者實際家なる彼をも語り、思索をも出來得る限り詩に取り入れんとするのである。今一つ『神曲』には著しい特色を有してゐる、即ちそれが *allegory* の文學であるといふことで、中世期より彼の時代に迄傳へられた文學上の約束又は傳統を遺憾なく取り入れて居る點である。即ち宗教的教

訓的色彩の甚だ濃厚であることで『神曲』は *moral* を基調としてゐるといつても可い。それを表現する場合主として中世期の諸學者の説に従つて組織し體系を得たこのことであつた。

ダンテの一保護者と見られる *Can della Scala* に送つた書簡(書簡集第十)は普通『神曲』の序文とも見られる、此の中に『神曲』を讀解する人に對して次の如く要求してゐる、
「此の作品の有する意味は一種に限らぬ、むしろ多義 *polysemum* である、即ち様々の意味を有してゐる。第一は文字に依り傳へらるゝ意義で *sensus est qui habetur per litteram* 第二は文字が意味する事に依つて傳へらるゝ意義 *qui habetur per significata per litteram* なり。前者は文義的解釋 *litteralis* 後者は譬喩的 *allegoricus* 神祕的 *mysticus* 解釋なり」^p

實例に就いていふに、聖書に「イスラエルの民埃及を出で、ヤコブの族は外つ國の言葉語る民より去り……」とあるを、若し文義の上よりせば、單にイスラエルの子孫達がモーゼに率ゐられて埃及を去つた事件をいふに過ぎない。譬喩の方面より解せば、吾等人間の罪惡がキリストに依つて贖はれることを意味し、倫理的意義 *moralen sensum* では人の靈が悔改に依り罪惡の悲痛と不幸より釋放されて祝福されたる状

態 *statum gratiae* に到るを云ふ。又 *sensum allegoricum* では吾人の潔められたる靈が現在の無常の束縛を脱し、久遠の榮光 *gloria* に入ることの意味する。かく四種の解釋より作品に入らなければならぬ、この事は饗宴篇第二ノ一にも力説してゐるので、物語、信仰、行爲、希望の四義がある譯である、即ち *littera* = *gesta refert*, *allegoria* = *quid credas*, *moralia* = *quid agit*, *anagogia* = *quid sepeo*。されど重要なるは文義と譬喩的解釋であつて文義又は歴史の意義と別にしなければならぬといふ。同書に又曰ふ、譬喩的意義は、此等物語の上衣の下にかくされたものにして「美しき物語の下にかくされた真理なり」(二ノ一・二〇)、故に文義は常に「それより他のもの殊に譬喩の主題又は素材となるものなり」と。由是觀之如何に彼が倫理哲學などの思想に重きを置いたが解せられる。

而して『神曲』を今此の方法に従つて解釋せば、全作品の題目とするところを單に文義の上よりせば、人間の魂の前後に於ける状態を取扱へるものにして、全作の所論は此を中心として廻轉す。譬喩の見地よりせば、其の題目は人間にして、人がその自由意志を行使することの善又は惡に依り *Prout merendo et demerendo per arbitrii libertatem* 正義に依つて賞罰せらるゝことを意味す(書一〇)と。作者自らが斷る處に據ると『神曲』のかくされたる真理は明らかに自由意志であり、倫理的思想の展開がその重大な

る役目であることが解る。されば彼は單にロマンチズム時代の文藝家の主張するやうな奇異な感情や詩的熱情のみでは満足出来なかつたことは確かに窺はれる、詩的創造以外に一面人類の歴史的発展が如何なる法則に依つて司配されて來たか、又現實の我々生活が如何なる法則に司配されなければならぬかを説明せんとするのである。彼は元より學問では充分に説明出來ぬことのあることを知り、科學的説明の止まらなければならぬ限界を自覺してゐたのであるが、彼以前の先哲が爲したる歸結をば彼は更に深き自分の經驗と内省とによつて『神曲』の如き詩的大建築に見出さんとするのである。故にこれに書き表はされたるものは、常に倫理思想の體系とかその機械的羅列に止ることなく、背後に彼の人格が立ち、彼の強い信仰が基礎を爲してゐる。

ダンテは倫理思想の出發點を、或はひろく人生の基調を自由意志に置いた。此の事はアキキナス Aquinas と同様であつて、哲學的神學的考察もこれを中心思想としてゐるのであつて、此れなくば吾人の道德界に於ける法則は混沌に陥り、キリスト教の信仰として大切な *divine justice* の思想も根本から崩れて了ふと考へるのである。

自由意志の説明の基礎として *intellect* と *affection* とを區別する要がある。前者

はその過程より見るに、一步一步それに先立つものに依つて妥當性が決せられ、かゝる關係を辿り行くことに依つて知識は築き上げられるのである、故に知識は *axiom* から發するものだともいへる、例へは幾何學の如くに。之に反し吾人の *action* に就いて見ると、これは寧ろ目的に依つて決定せられる、即ち知識の如くに現在の狀態から出發するのではなく自己によつて欲求せられるもの、即ち終局から出發する。知識が *axiom* なり第一原理なりより出づる如く、此れは祝福 *Blessedness* を目的としてゐる。而して何故にこれを目的とするかは、人間には知られないとしても、自明の理である、従つて人はこれに對しては責任を有たない。偕て祝福は今有しないもの又は知らないものを得たときに與へらるゝものであるから、そこで現在の自己の狀態と終局目的とを勘考しなければならぬ。此の時行爲に何等か過があつたとしたら、それは現在の狀態と次の階段とに十分の關係が保ち得なかつたといふのではなく、窮極目的に一致しなかつたのである。

併し第一原理や窮極目的に對してこそ人は責任を有しないが、目的と刹那の衝動とは常に一致させなくてはならぬ、茲に於いて訓練の要がある。アクキナスは祝福に依つて單に人間の目的が決定せられるのみならず手段までも定められるといふ

のであるから、ダンテよりも一步徹したいひ方である。就れにせよ大切なることは機械的なる事物と人の行爲との相異である。人は consequence によつて選ぶとすれば、*antecedant* によつて決せられるものとは異なる。機械的なる事物は今生起するとして、それは既に以前生起したことによつて決定せられるが、人間の行爲は將に生起せんとするものに依つて決定せられるのである。即ち可能性に依つて、或はそれが想像に依つて決せられる。此の際それは未だ實現されてゐないのであつて、そのものゝ中から彼の行爲が向けらるべきあるものを選択する。故に人間の意思は自由であるといふべきである。換言せば過去の事實に依つて決定されず、選擇するに當り以前感覺に表はれた暗示に司配されることが無いといふ點で、かつ色々なものゝ中から選み取るといふ意味で自由である。行爲の事實に先立ち彼が既に選んだのであるからその自由に對しては責任が隨つて來る。惡の道を取つたとせばその前に彼の惡の選擇が先行する、此の惡の選擇に附隨するものは呵責である。

石を落下するとき、それは自然性に隨つて地球の中心に向つて落下し行くのみ、それを中途に於いて變更することは出來ない、たゞ神の力のみその奇蹟のみこれを能くする。人の場合はかゝる自然的決定性はない、多くの方向からあるものを選定す

るのである。以上の如き自由意思の思想の基礎にダンテは立つてゐる。

儲て神は一面に善を意志とする、即ち自分より他の者にもその善を傳へんとする。その自己を表はす形式は恩恵と正義である、正義は神の善を目的とせざるものに加へらるべき罰を伴はなければならぬ、故に罪惡とそれに伴ふ Inferno とがある。さればインフェルノその物は別として、神の善の一部を構成するものであるが故に善である。又苛責はそれを受ける者に取つては兎も角罪過と共に善である。故にダンテは彼のインフェルノの存在の理由としてその最初に、即ち入口の門銘に有名な句を掲げてゐる。

我過ぎて人は憂き町に行け、

過ぎて人はとはの悲に行け、

我過ぎて人は亡びの民に行け、

いと高き造主正義を動かし、

聖なる力ボシナテを造り、

いと高き智と原始の愛われを造る。

永遠なるものを除きてわが前に造ら

れたるものなく、われはどほに續く、

此處に入るものはすべての望を捨てよ。

(三ノ一―九)

これによつてインフェルノが神の愛の表現であることが知れ、而かも永遠に續くものであるとするが故、此處に居る者は永遠に呵責を受けなければならぬことなる。然らば道德的精進なり悔改なり、それら最も大切なるものは如何なる意味を有するか、永遠に罪人であることは如何にも不合理の如くに考へられるからである。

それに對する答はインフェルノにゐる罪人共の特徴を見ることに依つて明かになる。即ち彼等は此處に於いても尙ほ地上に在つて犯したと同じ罪惡を繰り返へし、或は模倣してゐる、道義的感^レ起さないことは前生と何等變りはない、かつ悔改めることをしない。インフェルノに於いては悔改が無用といふのではなく、彼等は悔^レ改めることを欲しないのである。例へば不義に依つて殺されたフランチェスカを見るに第五歌、彼女の一途に愛人を想ふ念は、かつ彼女の同情すべき境遇と共に所謂不義といふ名目に就いて幾分斟酌を加へなければならぬが、それにしても彼女は不義の事實に對して自己に責任を問ふことなく、却つて第三者にそれを轉化しようとする。

してゐる。故に更に罪惡を助長するものといつて可い。例へば陰陽師が、當時よく言つてゐる、かの天體が意志を司配するといふ意見は當を得ないし、又肉體的の習慣、幻像など外的の力に直接意志の發動を歸せしめることの不當なるは、アクキナスも亦強く主張する處である。彼等は神の正義に依つて彼等に相應はしい處に行き、寧ろそれらの罰を自ら選擇した迄である。故に彼等はその苛責の原因からまづ免れようとはしないのである。故に色々の段階のあるインフェルフには此處に入る來る者を拒む門も門衛も要らない。神の美なる目的から離れること、及びそれに加はる呵責をダンテは恰も加速度の如くに取扱つてゐる。アクキナスにはインフェルフに就いて委細の説明はないが、ダンテは精確な具象的構成を與へてゐる、これその作品の性質上然るべきことでもある。宇宙を秩序ある神の意思の象形文字的に見る中世期の人々の態度として、ダンテも亦『神曲』を作る場合に、出來得る限り當時の學問に従ひ、インフェルフの構造に於いても成るべく合理的な倫理思想の體系を根底に置いた。

前に言つた如く人の靈は恰も「焰」がその本來の處に歸らんとして上に昇る如く「祝福」即ち窮極目的に一致しようとする。人は本來知識を得んとする、之知識は「人間の

精神にあつては完全なるもの也、故に祝福はこの内に在る、されば人は生れながらにして知識を求む〔饗宴一ノ二〕併し此の場合人間は方向を選択し得るのであるから、窮局目的に一致すべく修練の要がある、Purgatorioの存在の意味が於茲明瞭である、此の位置組織がダンテに依つて明瞭にされた如く、其の思想も亦中世期の教會の言ふ處よりも判然としてゐる。神がその善を傳へるに當り、angelsは記憶、悟性、意志を神より與へられてゐるが、更らに pure spiritualなる彼等は「悦んで神の顔を仰ぎ、その凝視をそこより轉ずることなきが故」神の心にあること總べてを直接に知るが故に、彼等の觀るものは新らたなる物に依つて da nuovo obietto 妨げらるゝこともなく、又最初に印象を與ふる根本の物より離れた印象に依つて、敢えて記憶を新らたにする要もない、神の恩窮の輝 *grazia illuminante* を受け入れることによつて、たゞ祝福を受けてゐる、知識の全局を直ちに把握し愛全體を感得するが故に、云はゞ神を寫す明鏡であるから、彼等の精神には發達といふことは無意味である、(Paradiso 一九)。然るに人間はそれらとは異なる、嬰兒の朦朧とした意識から最後に天使の如き純知的内觀に迄發展しなければならぬ。神が自己を表はすに當り人間の如く肉體と靈との結合體にあつてはそれは漸新的である。而かも靈の素材は感覺を通してゝあるが故に、物質界はむ

しろ教育場といふべきである。従つて現實生活に就いて重大な意味が起つて來る。現實生活を重要視するダンテの如きは中世期の學者の中まれに見る處である。例へば彼の *De Monarchia* に於いて此の思想は明白に言ひ現はされてゐる。此れに依ると、ダンテは地上樂園を來さんと欲するのである。祝福は神の意志に一致するにある。われらの欲望と理性とが融和するとき、かの恩寵に依つて神の本質を觀るとき初めて我等の理想的生活が實現する。併しダンテ等の考によるとアダムとイブ以後人間は地上樂園を失つたのであるから、神の恩寵とキリストの贖、信仰などに依つて此れを經驗することが出来る。故に實際的生活では哲學明知(普通の道德的修養などの意)と靈的の導を要する。ブルガトリオの頂上に地上樂園の置かれてあることも、道德と哲學とを象徴するウエルギリウスがインフェルノよりブルガトリオの最後までダンテの嚮導者師父となつてゐることも、これに依る。

併しダンテが表はした地上樂園は實際上甚だ寂漠たる感がある。平和であるが静寂である。此の廣い樂園にマテルダを除いては殆んど人影も無いのは如何。ブルガトリオは天に昇る——祝福の世界に入る準備のやうにも思はれる、地上樂園を經驗せるものは既早や永くそれに留らうとはせず、直ちに祝福の世界に飛翔するの

である。而して Paradiso はかゝる祝福の現はれたる處、ダンテの思想、信仰、實際生活、詩に於ける努力を結びつけるものであつて、彼に取つては實に無限の綾を織り出し、生命の源たる白光にも比すべきか『神曲』はむしろバラデインの開展であるといつて可い。

二

インフェルノの序ともいふべきアンチンフェルノに基だ不愉快なる一群の者が居る、彼等は善にも附かず惡にもつかず、このため「天よりは追ひ出され地獄の底も彼等を受け容ることを拒む」恩寵にも正義にも見放された者である(三ノ二二以下)。實際上かくの如き人間が有り得るとは考へられない、たとへアンニユイの中にもなほ善に向ふ努力が惡に到る意志かはある筈である、彼等がありとせば機械的物質に近い點もある。然るに本來祝福に向はなければ人間であることに依つて彼等はインフェルノの一部に置かれてある。此等の人に今意志を加へることに依り、修練か墮落か就れかになる。インフェルノの底の方にある者を見るに、彼等は有意的に惡の爲めに惡を求めてゐる。又翻つてブルガトリオを見ると、その麓にあつたため

たゆしく物憂げに待ち焦れてゐる亡靈がゐる(第四歌等)彼等は因循にして悔改を怠つた者である。ダンテの考よりすれば前に説ける如く世俗的道德の修練と共に宗教上の信仰サクラメントなどが祝福に向ふための要件とするのである。いづれにせよ此處にゐる人達はその第一の目的は頂上なる地上樂園にある。今彼等に悔改と向上への努力が來らなかつたとしたら前のインフェルノの者と何の選ぶどころがあらう。斯く考へて見るとインフェルノとブルガトリオは下降と上昇の相反せる對立をしてゐる。で私は此の二つの *Cantiche* を取つてその *moral system* を要記しようと思ふ。

先づインフェルノとブルガトリオとは形態上對比する點が多い。地獄は北半球の地下を占める大洞窟で、地球の中心を頂點として略々圓錐形を倒にしたやうで、註家はイタリアの水瓶(*conca*)に比してゐる、ダンテは谷間を経て間もなく此の入口に達したといふから、底面は地上より餘り深くはない。その地上の中心はゴルゴタとなつてゐる。ブルガトリオは殆どダンテの獨創になつたといふて可い、全く大洋である南半球に屹立する高峯であつて頂は火圈に達する。形はこれを取つて倒にインフェルノに入れるならば大略一致しさうである。地獄の中心には神に反逆せる

天使ルチフェロが居り淨罪山上の樂園には神の意に従順な人間がある。入口を見るに地獄の縁ともいふべき Limbo には洗禮を受けないギリシア、ローマ、アラビアの賢哲達のある綠野がある。これは地獄には全く例外とすることの出来る程美しい光景を描いてあるが、淨罪山にもその登山口にあたりダンテ等の憩へる花野がある。又山は七つの臺に分たれ上に到るに従ひ漸次小さく、各 Girone には門があつて天人が衛る、地獄は *Circle* に分れ下に次第に小さく各の圈には古典神話上の怪物、その他それに類するものがあつて罪人を呵責してゐる、但し地獄には門などを設けない、これ彼等は自己の罪過に相應する呵責を求めて自然に其處に止るが故である。地獄は下に到るに随つてその呵責は重く淨罪山では上に登るにしたがつて軽い。地獄では呵責はたゞ呵責に止るが、淨罪山では呵責は罪過を免れそれに打ち勝たんとし、罪過の記憶をのがれんとし或はそれに對する贖のため、反省のため自ら進んで求めるもの、謂はゞ向上への一階段である。

組織の上より見るにインフェルノは *Circle* の市より上下に分けることが出来る、上部は自己の欲情の奴隷となり意志の弱いもの、下部は他に危害を目的とするもので次の表の様である。

(インフェルノ)

罪

罰

Antinferno

{	怯懦	{	裸體ノ虫ニ刺サル
	洗禮ナキモノ (Limbo 貴キ城)		不斷疾走

Incontinenza

{	色慾	{	業風
	貪食		穢土ニ臥シ雨注グ
	貪慾及浪費		互ニ相反揆ス
	憤怒		Stige
Accidia			

異端

火焰ノ墓

Violenza

{	(1) 他人ニ對シ (掠奪殺人) Flegetonte ノ血沼
	(2) 自己ニ對シ (自殺放蕩) 猛犬ノ森
	(3) 神ニ對シ { a, 獸慾熱砂毒流 b, Sodomist c, 高利貸 }

Dite

{	1. 媒淫	惡鬼ノ呵責
	2. 誘拐、阿諛	汚物
	3. Simoniaci 僧職賣買	岩穴中ニ倒マニ
	4. 陰陽師方	顔ヲ後向ニス
	5. 濫職 Barattieri	沸騰セル血河
	6. 偽善	鑛金ノ僧帽法衣
	7. 偷盜	蛇ニ卷キツカル
	8. 惡シキ進言	焰ノ舌
	9. 紛爭ヲ起スモノ	四肢斬截、自ラ刎頸
	10. 贗造、詐欺	醜キ病氣ノ惡臭

SedediLucifero

Frode

{	1. 親族ヲ裏切ル	}	結氷
	2. 國家結社ヲ裏切ル		
	3. 友ヲ裏切ル		
	4. 主人恩人ヲ裏切ル		
Lucifero			

過

淨罪

(ブルガトリオ)

懈怠 { 性怠慢ニテ悔改ヲ後ル
殺害ニアヒ悔改ノ暇ナシ } 焦慮

I 傲慢 他ニ優レントス 重キ石
(主ノ祈 謙遜ト傲慢ノ實例)

磴 謙遜ノ天使

II 嫉妬 己ニ優レラレンコトヲ怖ル 粗布ヲ被リ
眼見エズ (連禱)

磴 友愛ノ天使

III 憤怒 復仇心 濃キ烟中ヲ行ク (Agnus Dei)

磴 平和ノ天使

IV Accidia 斷エスリ走ル (勤勉トaccidiaノ例)

磴 熱心ノ天使

V 浪費 { 手足ヲ縛シ他ニ伏ス
貪慾 { (清貧ト貪慾ノ例)

磴 正義ノ天使 詩篇 119

VI 貪食 飢渴ニ耐ユ (美果清潔)

禁慾ノ天使 (詩篇 制慾ノ實例)

VII 色慾 火焰中ヲ行ク
(讚歌 Summae 純潔ト色慾ノ例)

地上樂園

インフェルノ第十一の歌に此處に於ける罪惡の分類の基礎とでもいふべき言葉がウエルギリウスによつて語られてある。彼等が今デイテの町に下らんとするときダンテが導師に今迄會つて來た罪人は、何故デイテの中に於て罰せられないのかと尋ねる、此に對しウエルギリウスはたしなめるやうな口調で答へる「Non ti rimembra di quelle parole, con le quali la tua Etica pertrata le tre dispositioni, che 'l ciel non vuole—Incontinenza, malizia, e la matia bestialitate?」御身の道德書に神の好まれざる三つの性質即ち懈怠、惡意、獸慾のことに就いて説きたるを忘れたるか。この内 Incontinence は神の怒を買ふことと少なくよつて罰を受くることも軽く、又これらの罪惡はデイテの中にある者より離れ、「神の復仇の彼等を打ちことまたそれ程に激しからず」。デイテの中の罪惡に就いては D'ogni malizia ch' odio in ciels acquista, ingiuria è il fine ; ed ogni fin cotale o con forza, o con frode altrui coquista 「天に於いて怒を買ふ罪惡は危害を目的とす、すべて violence によるか又は fraud によつて他人を艱ます」。此の中 (1) Violence は三種の Persons に對して加へられる、(a) 神に對して、あつて、即ち心に神の存在を否定し、褻瀆し、自然とその惠 *bontade* を蔑ること、(b) 自己に對し、自己の生命と財産とに危害を加ふ、(c) 他人の身體生命とその所有物とに對して加ふ、即ち殺害、傷害、掠奪、偷盜など。(2) Frode は「人間に限

られたる罪惡なるが故神に喜ばれざること殊に甚だしく一層低き處に置かれ、呵責を受くること亦大なり」この *faud* たるや必ず「良心を嚙む」ものであつて、(a) 自己を信任するものに對して犯すか、(b) 自分に信用を置かぬものに犯すかである。後者 (b) は自然に具はれる愛のきづなを破壊するもの、例へば偽善、諂諛……の如し。前者 (a) はその愛に對して犯すに止まらず、特に信頼する者に向つても及ぼす、それ故宇宙の中心、デイテの度に置かれ、有ゆる裏切者が永久の艱みを受けてゐる。

以上の説明を見てダンテが地獄の罪と罰との組織には十分の用意があつたことが察知せられる。

轉じてブルガトリオに移る。此の篇ではその第十七歌に彼の意見を伺ふことが出来る。而かも上來述べた自由意志に關しダンテ及び此の頃可成り複雑な内容を持つてゐる *amore* (普通 *love* と譯す) を中心として、人間の精神の向上と墮落とを論じてゐる。

Amore は *universal* な性質として造物主の中にも亦造られたるものゝ中にも存する。 *Ne creator, nè creatura mai…… fu senza amore*. 而して此の *amore* に二種あり、(a) *amore naturale* (b) *amore d'anima* とす(尤もアクキナスは三種に分ち *naturalis*, *sensitivus* 及び *intellectualis* 又は

rationalis としてゐるが大同小異である、前者は謂はゞ生得な instinct であつて後者は自由意志である、前者が誤つことのないことは前に述べた通りであつて、アクキナスの dilecto naturalis sempre est recta といへるが如し。然るに自由意志は誤つた方向にむけられることにより per malo obiecto 又は缺陷 per poco により、過度なるにより per troppo di vigore 三様の過を來す。併し自由意志も至上善神と徳 primi bene に向けらるゝか又は適當なる程度に於いて第二次的善 secondi bene に向けらるゝ時は罪惡的な快樂の原因となることはない。されば amore は善にまれ惡にまれあらゆる行爲の原因である。

然らばそれが惡として表はるゝには如何。(7) amore は主體 Soggetto (Scartazini) によれば Soggetto とは此の場合狹義の意にて Persona 即ち愛を持つ人の幸福より離れるとは出來ない、即ち人はその欲しないものを求めない。又自分自らを惡むことは不可能である。これは『裂宴』^{コムがサガキ}にも既にいへる如く、單に人のみに限らず、萬物は委くその本來の場所 Inogo proprio に歸らんとする、故に amore は本來の場所と吾等の精神との親和力の如きものだとも考へられる。(2) 人は原始の存在者を離れて孤立的存在するといふことは考へられない、自己を惡み又は傷くることの不可能である以上、人が

生命と活動と存在とを受けてゐる神を惡むことも出来ない。(3)然らば害を求めるとせば自己より以外の者に向つてはなくてはならぬ。これは亦次の三種に現はれる、(a)他人と自己とを比べ自ら優越なるものならんがため、たゞこれだけにて他人に惡を望むものである、このためには當然他人を抑壓しなければならぬ。傲慢これである。(b)又勢力、愛、名聲を失ひ他人が己れに代はらんことを怖れるものがある、或は自己の欲するものを自ら有せずして他人がこれを享樂するときは反對に他人に害を望む。嫉妬これなり。(c)他より害を受けたるとき必ずこれに復仇せんとする心が生ず。このことは必ず他人を害せんと思ふものである。しかもこれらは他人にも害を望むが教に最も惡しく、淨罪山の下部にある。尙ほこの外に咎としては軽いものがある、その求むる對象は幸福であるからそれ自身は元より過はないが、求むることに於いて熱心が足りないか(1) *acidia*、又餘りに過ぎるか(2)貪慾(3)貪慾(4)色慾にて、終局目的に一致しない。上圖に於いてブルガトリオでは下部から上に登るに従ひ苦が次第に輕減するのは此理に依り、一面次第に神に近附くが故である。

今二者の罪過に何か共通し或は何等か密接な關係はありはしないか、此の問題は可成り古くから色々の學者の間に論じられたが、更らためて一瞥しよう。

ブルガトリオの罪は七種であるが、インフェルノでは大別して八種とすることが出来る。即ち

	台		
Purg	7	色	慾
	6	貪	食
	5	貪	慾
Accidia	4		
	3	憤	怒
	2	嫉	妬
	1	傲	慢
圈	○		
	1	罪	Limbo 徒
	2	色	慾
	3	貪	食
	4	憤	怒
Accidia	5		
	6	貪	慾
	7	異	端
		兇	暴
	8	欺	瞞
	9	裏	切
Infer			

二ツのカンチケを比較するに相共通する處もあるが夫々特有のものもある、インフェルノでは受洗せざる異教徒の賢哲、キリスト教の異端邪說者、*violenza* 及び *frode traditore* である、而かも *accidia* は充分表はれてゐないから、これはブルガトリオの特有に教へられる。ブルガトリオには尙ほ嫉妬及傲慢で、共通のものは五種となる。而かもインフェルノには尙ほ小區分の罪惡が多くある。

そこでダンテは同一の原理によつて兩カンチケを築き上げたか何うかといふ疑念が起つて來る。もし何らか基準にするものがありとせばそは何であつたか。インフェルノではアリストテレスの『倫理學』を明らかに示してゐるが、これは同書第七ノ一にある極めて僅かの言葉に過ぎぬ、人の避けなければならぬ罪惡が三種ある、(1) *Incontinentia* (2) *malizia* (3) *Bestialita* これである。(1)は *impulse* に關係した罪惡であつて、自制と慎重なる考慮を缺いて選擇した罪惡であり、(2)は惡意惡行が既に習性となつたものである。この二つの方面によつてダンテはデイテの市の内外に罪惡を分けたのであらう。それにしてもブルガトリオの説明には用ひることは出來ない。

インフェルノではリムボより上は眞の意味にて罪惡といふことは出來ぬ、プランチエスカの出る第一ツエルキオ色慾よりルチフェロ迄が眞の地獄である。ルチエフェロは神への反逆者を代表するものだから罰の重いのも當然である。ブルガトリオでも地上樂園とアンテブルガトリオを除外し、色慾が最も軽く傲慢が最も重い。一體色慾なるものも仔細に考へるならば美しき感情を含み又は萌芽を有してゐる、ラハブの如き娼婦もそれを一變して神の愛に迄清めてゐる、ダンテ自らの體驗に依ると戀愛は彼をして敵を愛する心に到らしめ神の愛を知ることが出來た、かく高尚

な美な善な胚胎を有するものでありとせば、たとへ誤つた性愛と雖も罰を受けることは軽い。兩カンチケにてこれが最も軽いのは當然である。傲慢はブルガトリオに於いて最も重い、法王 Gregorio (六〇四年頃歿)の *Moralia* によれば傲慢 *Superbia* は惡魔軍の將 *dux exercitus diaboli* (一ノ四五)であり、諸惡の根 *radix cuncti mali* なり、諸惡の皇后なり、諸々の罪惡此より産る。すべての罪人の首領 *Principium omnium pectorum* (アクイナス)なり。ダンテはイブの墮落の原因を彼女の慢心 *trassasar del segno* (天、二六、一一七)に歸した。而してルチフェロの墮落も亦實に彼の傲慢なるにあつた「*principio del cader fu il maladetto superbir di colui, che tu vedesti da tutti i pesi del mondo costretto.* 故にルチフェルは亦傲慢を代表するものと見て可い。又神曲の古註家 Benvenuto 曰く、「傲慢程神に嫌はれるものは無い、外の罪惡には何等か斟酌する點があるが此れには全然ない。又その後から近く尾いて來るその娘なる嫉妬とても然り」と。

大體二カンチケの大綱だけは又一致するがその少部分の罪惡は如何に見るか。前にベンヅエストは「罪の娘」の語を用ゐてゐる、私も亦此の言葉に依つて解するとき、裏切者は傲慢の娘としてこれに入れ、十塚に別たれたる諸罪惡は (Tiede) また嫉妬の女とすべきか。自殺その他も亦 Harrison の説に従つて *accidia* に歸することが出来る。

かくすることに依つてインフェルノの罪惡は大體ブルガトリオのそれに一致せしめることが出来ると思ふ。

偕てブルガトリオに擧げたる分類は中世期の所謂 *principali via* に一致する、かつこれは公教にては公認しないが一般に用ひられ、グレゴリオ始めアクキナス、ラティニ *Brunetto Latini* に至る迄多くのキリスト敎學者が、大體この七種の罪惡を擧げてゐる處を見れば、ダンテも亦それを學び、平常彼の罪惡觀に於ける又分類に於ける基礎をなしたのであらう。この點からブルガトリオが組織の基礎になつたといつて可い。

これはかつて倫理學會で話したものを略記したので十分推諷を終る間もありませんでした讀者幸ひに諒せられよ